原発を止めた男

高知県旧窪川町の島岡幹夫さん

“わが人生にいささかの悔いもなし”とおっしゃる、島岡幹夫さん。

3・11以降、高知県旧窪川町（現四万十町）に一躍脚光を浴びている人物がいる。町の人たちがその人物とすれ違う時は敬意のこもったまなざしを向け、中には近寄って「あなたのおかげだ」と握手を求める人もいる。

その人物の名前は島岡幹夫さん、72歳。高知県で評判の高い〝仁井田米〟を中心に息子夫婦たちと7町歩を無農薬有機農業で栽培している農家である。しかしいま、島岡さんが注目されているのは農業そのものではない。1975年、窪川町に原子力発電所建設計画の話が持ち上がった時、いち早く反対を訴えて、大きな圧力と闘いながら原発計画を断念させた中心人物だったからである。

福島原発が事故を起こしたいまだからこそ、国民は放射能に敏感になり、原子力発電所に忌避感を抱くようになっているが、当時は多くの住民は無関心であり、無知であった。むしろ積極的に誘致してまちおこしにつなげたいと考える人も少なくなかった。

電力会社は、原発は二酸化炭素を出さない、コストが安い、地球にやさしい、若者の夢の職場だ、町の税収は一気に増えるなどとバラ色の夢を振りまき、当時の自民党政権は全面的に支援してきた。各県の知事をはじめ、地方の主要団体の幹部も国と一緒になって推進してきた。原発は国策だったのである。

これといった産業がなく、若者の流出が進んでいる町では、原発をまるで救世主のように見ていた。過疎化と高齢化、不況にあえいでいた町は、命を担保にして原発建設を容認してきた。しかし、当時、38歳だった島岡さんは直感的に原発と放射能の恐ろしさを感じていた。

「実は私は高校卒業後、大阪で警察官を務めながら近畿大学の二部に通っていました。そのころ母親が乳がんになり、放射線治療を受けていたのです。そのためいろいろな本を読み、コバルト照射、アイソトープ、ガンマー線など放射能のことを勉強しました。母親は治療のかいもなく、1年7カ月の闘病生活後に52歳で他界しましたが、体は放射線治療のため炭素化して木炭のようになってしまいました。最後は骨髄腫瘍を発病して死亡しました。ですから原発の話が持ち上がった時、まず母親の体を思い浮かべたんです」

県の自民党議員団や四国電力のお偉方が、原発計画の話を持ち込んできた時、島岡さんは、高知県窪川町自民党支部の組織広報副委員長だった。

「私はおまわりさんになったぐらいですから根っからの保守、それまで選挙の応援を頼まれるたびに日の丸の鉢巻きをして、戦後の日本を堕落させたのは共産党と日教組だと演説していたほどです。高校時代は2年3年と生徒会長をしていたぐらいで、

かがり火 2016.4

反原発の島岡さんは、自宅のエネルギーを太陽光発電で賄っている。

反対運動の途中から窪川町議会議員となって、7期28年務めた。牛に寄り掛かられて骨折しながら選挙運動を展開した年もあった。

マイクを持たせると自慢じゃありませんが説得力のある演説をするんですよ。大阪から戻って自民党員になり、短期間で昇格して窪川町自民党支部青年局長になり、間もなく組織広報副委員長になりました。

どの町でも建設計画は最初は一般の住民には知られないように町の有力者たちに秘密裏にもたらされるものですが、私は、積極的な推進派である自民党の党員でしたから、いち早くこの情報に接することができました。非公式の会合でこの計画を打ち明けられた時、町の有力者たちは誰も反対の声を上げませんでしたが、私だけが〝ちょっと待ってくれ〟と、異議を唱えたんです」

当時はまだ30代、居並ぶ人たちは町の長老であり、何期も議員を務めたベテランばかりだった。しかしこの時、これは中途半端な気持ちでは中止に持ち込めない、徹底的に運動を展開しなければならないと決心した。やがてこの話が町に広がると、騒然となった。そして共産党が反対集会を開催すると聞いて、その会合に乗り込んだ。

「憎き自民党の人間が乗り込んできたので、彼らは私が集会をつぶしに来たと思ったらしいです。でも、その時、私は言いました。この町の人口は1万7000人、有権者は1万3200人。共産党、社会党、公明党の革新三派を合計してもせいぜい3000人、一方保守は1万人。

革新団体が主導して反対運動を展開したとしても必ず保守系につぶされ、原発は建設されてしまう。この運動は私のような保守の人間が中心になって進めなければ大きな力にならない。私を反対運動の代表にしてほしい、皆さんは文書を書いたり、チラシを配布したりなどは得意だから黒子に回ってほしいと訴えたのです」

この会合に出席して間もなく、島岡さんは窪川町自民党支部に呼び出されて除名処分を言い渡された。

賛成派と反対派、町を二分しての闘いが始まった。賛成派は潤沢な資金を活用して、住民を伊方原発、玄海原発、美浜原発、高浜原発などの視察旅行に招待し、あらゆる手段を使って賛成派を増やそうと画策した。一説によると13億円の宣伝費、接待費が使われたと言われている。

一方、島岡さんは郷土懇談会と名付けた学習会を開催して住民と一緒に原発を学び、啓蒙して回った。

「ちょうどそのころ出版された岩波新書の武谷三男先生の『原子力発電』を教科書として勉強しました。この本はわれわれ反対派のバイブルとなりました。

しかし、なかなか反対派が増えません。東京からは自民党の桜内義雄幹事長、中川一郎科学技術庁長官、佐々木義武電源立地本部長などを続々送り込んでくるし、一流大学の著名な学者や日本中の電力業界のエリートたちも来て、いかに原子力が安全で、割安で、町の発展にどれほど貢献するか分からないと訴えますから、どちらの言い分が正しいのか住民も分からなくなってしまうんですね。利権にさとい人には、お金をちらつかせます。

私の主張ははっきりしていました。窪川町には田んぼが2400ha、山林が2万3000ha、乳牛と養豚は昔から評判も高く、工業はないというものの耕種農業と畜産で80億、木材林業生産で30億、10社ほどの縫製工場や加工産業などを合計すると150億近くあったのです。四国有数の食料生産基地なのに、たかだか20億、30億の税収に目がくらみ、そのうえ耐用年数が30年程度の原発のために、2000年も続いてきた農業を犠牲にするのは愚の骨頂だと主張したんです」

電力会社は政府と一体だから、金もあれば権力もある。次々に有力者が籠絡されていった。島岡さんたちが取った反対運動は当初から、未来に大きな禍根を残さないため、任期4年の町長や町議会に議決を委ねず、全町民有権者の投票により原子力発電所の諾否を決める住民投票条例の制定を要求した。町は町議会が誘致決議をし、町長が執行しようとしていたので推進派町長の解職を請求することにした。

「その時の町長は原発を誘致しないという公約を掲げて立候補していたのですが、当選して1年半後に主張をくるっと変えてしまったのです。しかもその町長は私の家内の親類、骨肉相喰む闘いになりましたが、そんな情に流されている場合じゃなく、私はリコール運動の先頭に立ちました。そして1981年3月8日の解職投票で、賛成633

夫が原発反対で走り回っていた13年間、留守宅と農業を守り通した和子夫人。

毎週のよう郷土懇談会と名付けた学習会を開催して、それぞれの思いを語り合った。

タイの東北のタラート村では「島岡農業塾」を主宰。ミミズの生きることのできる土地を荒らしてはいけないというのが持論。

2、反対584で解職に成功しました。しかし、解職に成功したことで、われわれの中にも油断が生じてしまったのでしょうね。その後の出直し選挙で、解職された町長がリターンマッチで再度出馬、今度はわれわれが立てた候補者が899票差で負けてしまったのです。われわれは再び危機に陥り、町の混乱に一層拍車が掛かりました」

出直し選挙では、町長は「原発投票条例」をつくることを公約に掲げた。従来、日本では海岸部に原発を建設する場合、海岸部の地権者と漁業権者の合意があれば立地できるとされていたが、この原発投票条例は、知事の許認可の前段階で全町民有権者の賛否投票に付するというものだった。町長もあまりの混乱に最後は全町民の声を聞かなければ治まらないと判断したのだった。この条例には自民党も電力会社も大反対だった。条例では投票結果に「従う」となっていたところを当時の法制局の高官が「尊重する」と変更を指示したほどである。

島岡さんたちの運動が徐々に実を結んだ。なかでも県原発反対漁民会議は「われわれの反対にもかかわらず海洋調査が強行実施されるなら、県下の反対加盟漁民と5000隻の漁船を動員、海上封鎖して闘う」と発表したほどだった。そのころ1986年4月にチェルノブイリ原発が大事故を起こして、原発への不信が一層沸き起こった。

そして、1988年1月、町長は遂に「任期期間中に原発の立地可能性調査ができないので、公約の責任を取って辞職する。窪川原発は今日的課題ではなく、調査を凍結棚上げする」と発表した。こうして13年間に及ぶ原発騒動に終止符が打たれた。

島岡さんの反対運動は常に危険を伴うものだった。懐柔、威嚇、嫌がらせなどは日常茶飯事に行われた。島岡さんは急発進した車にひかれそうなったこともあり、たびたび危ない目に遭っている。当時、肌身離さず身につけていた呼子を、いまでも記念にとってある。

窪川町の原発が一段落した後も、島岡さんの多忙は続いた。宮崎県串間市の原発計画、高知県津野町や東洋町の高レベル放射性廃棄物処分場など、原発にかかわるあちこちの町、山口県上ノ関、和歌山県日高、三重県芦浜などから講師として声が掛かり、飛び回ることになった。当時は原発に対しての認識はどこも甘く、宮崎県に行った時などは、原発をはらはつと読む青年もいて驚いた。

発端から決着までの13年間、本業の農業はほったらかしだった。当時飼っていた乳牛30頭の飼育は夫人の和子さんに任せきり、田植えの時も稲刈りの時も島岡さんは家にいなかった。

「私が全部一人でやったのよ。だから働き過ぎて背中が曲がってしまったのよ」と和子さんは笑うものの、「父ちゃんは偉いと思う。私は夫を誇りに思っています」と明言した。

いま、島岡さんは朝霧森林倶楽部に力を入れている。これは高知県の補助事業「森林保全ボランティア活動推進事業」に参加しているもので、ボランティアを募って森林の間伐を進め、その対価として間伐1haにつき6万円の地域通貨券が交付されるというものだ。朝霧森林倶楽部は現在会員約25名、島岡さんを除いてほとんどの人は山仕事には素人だったが、いまではチェーンソーも使いこなせるようになった。

「間伐が進めば、太陽が地肌まで届き、下草も生えて健全な森が育ちます。第一、会員は一日気持ちいい汗をかくので、健康にもいいと好評です」と、島岡さんは参加を呼び掛けている。

有機野菜の宅配事業などを展開する「大地を守る会」の国際局からの依頼でタイには13年前から農業指導に行っているが、すでに10回を超えている。ため池を掘って果樹園をつくり、高知から持参する種で野菜作りを指導している。経費はすべて自腹である。さらに島岡さんは、1992年に韓国の金源植さんが反原発運動を推進するために設立したノーニュークス・アジアフォーラムの会員として、韓国にも毎年訪れて土佐弁で、反原発の講演を行っている。

「経済を繁栄させるために農業を犠牲にしてエネルギーをつくり出そうというのは根本的に間違っているんです。原子力はたかだかここ数十年、農業は2000年の歴史があるのですから、農業を基礎にした国づくりを考えるべきだと思います」

いま死んでも人生に全く後悔はないという島岡さんの顔は、信念に生きた人の顔だった。